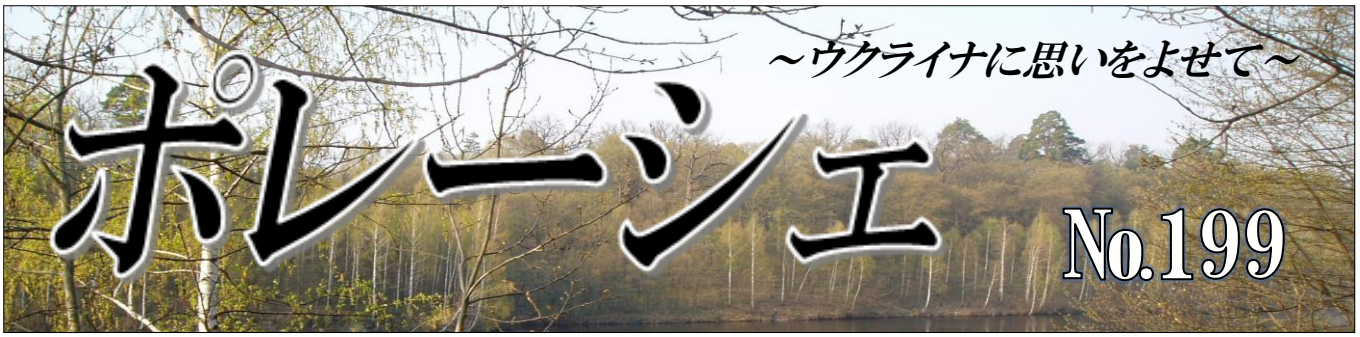
「ポレーシェ」とは、チェルノブイリ付近の湖沼低地帯の呼称です。



2024 年 4 月 15 日発行　　特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻反対の声明

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻開始から２年が経ちました。いまだ軍事侵攻は続き、多くの市民が甚大かつ深刻な被害を受け続けています。私たちはあらためてロシアによるウクライナへの軍事侵攻に強く抗議し、ロシア軍のウクライナへの攻撃の即時停止およびウクライナからの速やかな撤退を求めます。また、一日も早く原発を安全な管理下に戻すことを求めます。

私たちは、1986 年旧ソ連で起こったチェルノブイリ原発事故の被災者となったウクライナの人々を 30 年以上支援してきました。被災者の方々は、原発事故により、突然故郷を追われただけでなく、長きに亘って心身の病に侵されるなど、この上ない苦しみを受けてきました。今、その人々が、ロシアの軍事侵攻によって新たな命の危険にさらされ続けています。侵攻によって故郷を追われた人々、爆撃による破壊を受けた人々、家族と引き裂かれた人々、空襲警報の中で暮らす人々、受けられるはずの治療を受けられない人々・・・、挙げ切ることのできない苦しみを受け続けていると思います。原発事故と軍事侵攻という二重の不条理を背負わされた人々が苦しんでいます。

不条理な苦しみを受けるのはいつも市民で、不条理な苦しみを生み出すのは為政者です。ウクライナだけでなくガザでも市民が命の危険にさらされながら苦しみ続けています。市民はその命の危険の中で、助け合って命をつなごうとしています。助け合いは、平和の灯です。

為政者は、大義のために市民を犠牲にすることを即刻停止してください。いかなる理由があっても、市民の命と希望を奪い平和に向けた灯を消す武力行使は許されません。武力行使を即時停止してください。為政者に求めます。対話と外交によって、核兵器使用と原発事故の危機を回避し、武力行使を停止させ、市民の命を第一とした復興への未来を拓いてください。武力や戦争ではなく、対話と外交による平和構築を強く求めます。このことは過去の 2 度にわたる世界大戦とその後の様々な国際紛争を経て人類が学んだ教訓であったはずです。再び同じ声明を出さなくてすむようになることを強く求めます。

2024 年 2 月 24 日

NPO 法人チェルノブイリ救援・中部（日本）

ロシアによるウクライナ全面侵攻開始から 2 年

竹内 高明

2 年間で民間人 10,500 人以上が死亡(平均 42 人/日)、同じく 2 万人近くが負傷。この間、人口の約 3 分の 1 にあたる 1,400 万人が国内外に避難を余儀なくされ(うち 450 万人は帰還)、国内で避難した人も失業し生活に困難を抱えるケースが多い。およそ 1,460 万人が何らかの人道支援を必要としている--といった数字、あるいは爆撃を受けた(受ける)建物やシェルターに身を寄せる人々、前線で戦う兵士たちの映像は、本紙をご覧の皆さんにはすでに見慣れたものとなっているかもしれません。戦時下のウクライナでの暮らし、あるいは日本に避難してきた人の発言も、これまで掲載されてきた記事の数々で目にされているでしょう。私の立場は、侵攻を始めたロシアの現政権に対する抗議が大前提ですが、ここでは「なぜこのようなロシアになったのか」について考察する本をご紹介したいと思います。

マーシャ・ゲッセン『未来は歴史　如何にして全体主義がロシアを再び捉えたか』(2017 年、邦題『ロシア　奪われた未来：ソ連崩壊後の四半世紀を生きる』)は、1967 年モスクワに生まれ両親とアメリカに移住したのち、1991 年からロシアでジャーナリストとして活動、家族と自身の身の危険を感じて 2013 年アメリカに戻った著者が、1980 年代に生まれた 4 人のロシアの若者の人生を活写したもの。これを読むと、ペレストロイカの時期からウクライナへの軍事侵攻に至るまでのロシアの社会と政治の移り行きが、登場人物が肌で感じた生々しい体験として、また要所で引用される世論調査の数字を通じて、大変よくわかります。ここに描かれた時期に隣国のウクライナに滞在していた私としては、2000 年代以降のプーチン政権下のロシア社会の急激な保守化について充分認識していなかったことが、改めて悔やまれます。もう 1 冊はやはりアメリカで出たものですが、イェール大学歴史学部のティモシー・スナイダー教授による『不自由への道　ロシア・ヨーロッパ・アメリカ』(2018 年、邦題『自由なき世界　フェイクデモクラシーと新たなファシズム』)。ロシアの現政権が拠り所とする思想の源流をたどり、筆者が「永遠の政治」と名付けるその世界観が、ロシアのみならず欧米の政治家たちによっても体現されつつあるその経緯を、2010 年から 2016 年までの現代史で追います。「『永遠の政治家』たちは、政府は社会全体を救うことができず、脅威から守ることができるだけだという確信を広める。運命が進歩にとって代わる」「『永遠の政治家たち』は、政治的フィクションを伝える技術を用いて、自国でも外国においても真実を否定し、人生を見世物と感覚に矮小化しようとする」という「プロローグ」の一部を読んだだけで、これはロシアや欧米だけでなく、私たちの身近で起こっている現象だということがはっきりと感じられます。私たちが何をすればよいのかといえば、それは世界の動きから目を離さず、自国の軍事化を防ぎ、人々の生きる権利と言論の自由を守ろうとする世界の人たちと連帯する努力を続けることではないでしょうか。

「東日本大震災から 13 年。今思うこと」

岡崎市　小野　剛

東日本大震災犠牲者追悼式（鶴舞公園）

東日本大震災、続く福島第一原子力発電所の事故は、故郷福島を「フクシマ」に変えてしまいました。人知の及ばない天災と、人の驕りが生んだ（と僕は思う）人災。

あれから 13 年。この間、福島に独り残った母も亡くなり、僕と故郷を結ぶものは、主なき実家と父母が眠る墓、そして思い出だけとなりました。いつの間にか愛知での生活の方が長くなってしまった子どもたちにとっては、その思い出さえも薄くなり、遠くなる福島。色々なことが大きく変わってしまいました。でも、変わらないのは、人の優しさと思いやり。人との関りがこんなにも暖かく、そして力になることを強く感じた 13 年でもありました。

3/11 鶴舞公園にて

一方、今ウクライナやイスラエルのガザで起きている悲惨な現状は、本来その優しさと思いやりにあふれたはずの人により引き起こされている、という矛盾。そこで暮らす人々。朝目覚めても、まだ続く絶望と悲しみ。そのことに泣けてくる。自分にできることは、想像すること。祈ること。それが寄り添うことだとする欺瞞。

それでも僕は、彼の地の平和を祈ります。人々の悲しみを想います――生きて欲しいから。子どもたちには明日を見て欲しいから。目を背けたいくらいつらい現状は、耐えられないくらいつらいことかもしれないけれど、僕にできることはそれだけだから――。

2024 年度通常総会のご案内

日時　6 月 15 日（土）午後 2 時～4 時

会場　なごや人権啓発センター ソレイユプラザなごや 研修室

＊名古屋市中区栄一丁目 23 番 13 号　伏見ライフプラザ 12 階

＊地下鉄伏見駅 6 番出口より南へ徒歩 7 分

戦死者、被災者の数字が膨らんでいく、終わりが見えないウクライナとロシアの戦争。昨年秋、そんな過酷な状況下で、ウクライナの子どもたちから、生命の証である貴重な絵画 112 点が送られてきました。その絵画を一人でも多くの方々に観ていただくこと、それが 2023 年度のいちばん重要な国内の活動となりました。

総会ではウクライナ支援など、一年の報告をさせていただきます。ぜひご参加ください。

「ウクライナの子ども絵画展」　3／8～13　＠南相馬市小高区

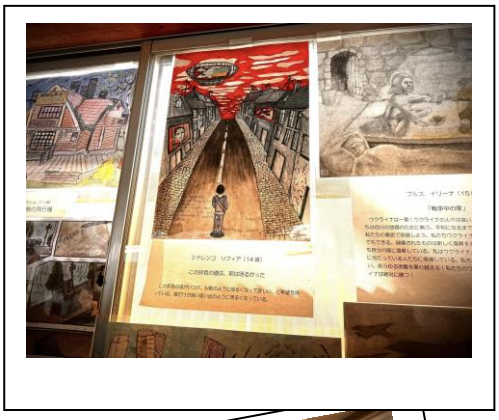
今年の 3.11 は、いろいろな意味であらためて震災を考える日となりました。8 日から 13 日まで、戦時下のウクライナの子ども達がチェルノービリ原発への思いとロシアによる侵略戦争への思いを描いた絵の展示を小高伝道所で開きました。

小高駅前の五区の行政区では、能登と小高の人たちに向けて、海に向かいお祈りしました。「俺たちの伝承館」でも、福島第一原発にむかってキャンドルを灯して願いました。

8 日は、10 年以上福島へ通い続けている大阪大学のアカペラサークルの「うたゆい」の学生たちが、伝道所で讃美歌を歌ってくれました。

11 日は小高伝道所で東日本大震災 13 年記念礼拝にも参加、夜はドイツからのお客様を迎え、夜遅くまで話をして帰られました。伝える事の大事さをあらためて思った 3.11 の日でした。

13 日で小高伝道所でのウクライナの子どもたちの絵画展は終了しました。お陰様で 6 日間の入場者数は、11 日の礼拝に来た方を含め 143 人に来ていただきました。皆様からのカンパ金 12,700 円、希来基金から 10,000 円をチェルノブイリ救援・中部を通じて、ウクライナに送って頂きます。ありがとうございました。



ウクライナに栄光あれ。子どもたちの幸せのために。(希来基金　小林友子)

【ウクライナ現地情報　　2024年1月～2024年2月】
チェルノブイリホステージ基金・イェウヘーニヤ・ドンチェヴァさんから届いたメール抜粋

★1月5日

・日本の西部[原文のママ]で起こった地震に対して、私たちのお悔やみと励ましの言葉をお受け取り下さい。私たちはこの天災についての記事を読み、映像を観ました。恐ろしいことです…。年頭の数日、たくさんの電話があり、皆さんの安否について、起こった場所と被害について尋ねられ、励ましの言葉を伝えてほしいと頼まれました。

・支援されたすべての粉ミルクを各病院で配布しました。配布報告をお送りします。今、写真が送られてきていて、私はそれをフェイスブックにアップします。

＊12月にジトーミル内務省病院管轄の、ジトーミルから30㎞のデヌィシ村・サナトリウムのリハビリ支援を実施。福島県南相馬市・希来基金支援金とチェル救支援金による。以下、その報告メール)

★1月22日

希来基金のプロジェクトへの追加支援。私はすでに、2つの機器とその配送の支払いをしました。皆さんからの支出金額は8,668グリヴナ(2つ目の機器の価格の50%)になります。私はもうフェイスブックに、サナトリウムへの機器の配送の写真をアップしました。サナトリウムではホールを改修し、そこにこれらの機器が設置されます。

★2月6日（デネシ・サナトリウム支援としてのリハビリ機器の件）

医療施設のために入手していただいたリハビリ用機器は、極めて貴重なものです。これによって私たちは、回復治療とリハビリテーションのセクションで、ウクライナの防衛者たちの健康をより迅速に回復させることができます。

★1月25日

ナロジチ自治体の橋修復プロジェクトの残金を、占領されていた村々の子供たちの支援に充てるという運営委員会の決定について説明ありがとう。これで、ナロジチ自治体の子供たちへの支援の新しいプロジェクトに具体的に取り掛かることができます。今、ナロジチ方向への出張に行くのに多少問題があります。コロステン地区ベーヒ村の道路がひどく破壊されていて、正確に言えばそもそも道路がなくなっていて、自動車を駄目にしたくないので…。消防士かパイロ技術者の車で行った方がいいかもしれません。頼んでみます。やはり支援対象の代表者とは知り合いになっておきたいですし、どこを支援するか、現地で決めたいと思いますから。

★2月16日

今後の予定についてお知らせしたいと思います。私たちは、福島第1原発事故の日に向けて、いくつかのキャンペーンを企画しています。いろいろな地区の、いろいろな学校の生徒たちに参加してもらいます。子供たちは、日本の人たちに向けたメッセージや絵手紙を用意します。これらのメッセージを、私たちの共通の友人である青葉幼稚園、真如苑、サレジオ小その他多くの方々に届けていただくことはできるでしょうか？私たちのメッセージが、日本の普通の人たちに届くのを見たいと思います。

★2月27日・・・『ポレーシェ』トップページの2・24メッセージ（声明文）について

励ましのお言葉と、すでに長年にわたって続く、絶えることのない友情に感謝します。とても感動的なお言葉です…。私は皆さんのメッセージをフェイスブックにアップしました。2年しか経っていないのに、戦時下の私たちの生活に対する関心は、多くの国で消えつつあります…でも普通の人たちは忘れておらず、私たちに同情してくれているのです。改めてお礼を申し上げます。

キーウを逃れて　　イリーナ・ペトリチェンコ

時間とは、過去から未来へ流れるもの、それとも一周するもの、皆さんはどうお考えでしょうか。

農業を営む伝統的な社会のほとんどは、一周するものと思われたようです。種まきをして植物の育ちを見守り、無事に収穫できたら次の種まきの準備をする、という周期の人生を送っていたでしょう。一方、もともと一神教の古代ユダヤ人の時間像は過去から現在・未来への一直線で、キリスト教とともに伝わった旧約聖書を介して西洋文化圏もそれを受け継ぎ発展させ、「進歩」の概念や「スパイラル」の時間像を追加しました。

私が生徒-学生-大学教員を長年やっていたからか、ウクライナにいたときは、時間が一周していました。大学によっては多少違いますが、母校のキーウ国立言語大学の 1 年は大体こんな感じです。9 月 1 日に新学年が開始⇒15 週目から前期の期末試験開始⇒自分が担当する科目の試験を終えたら実質的に冬休み⇒2 月の第 1 月曜日から後期の授業が開始⇒15 週目から期末試験開始⇒自分の科目の試験や年間報告を終えたら独立記念日の 8 月 24 日まで実質的に夏休み⇒8 月末は新学年の準備で忙しく⇒9 月 1 日めでたく新学年開始⇒また一周、また一周、また一周。

しかし、2 年前にはウクライナ国内の時間に大きなひび割れが出てしまい、みんなの人生も「2022 年 2 月 24 日以前」と「2022 年 2 月 24 日以降」に完全に別れていきました。戦争開始のムードを『戦争語彙集』（オスタップ・スリヴィンスキー作、岩波書店）や『侵略日記』（アンドレイ・クルコフ著、ホーム社）がよく伝えていますが、時間に限って言えば、最近ウクライナで出回る世論調査や統計まで潜在的に 2022 年 2 月 24 日を基準時点としています。たとえば、2024 年 3 月 12 日、キーウ市で 1,000 回目の空襲警報が鳴り、計 1,165 時間 26 分（つまり、計 48 日間以上）継続していたことが市の電子総合窓口「Kyiv Digital」のデータ※1から分かり、メディアも広くそのことを報道していました。それと、去年 194 号で紹介した統計のアップデート版をキーウ市長がまた発表しました※2（2024 年 2 月 24 日現在）：

- 地下鉄が防空シェルターとして同時に約 7 万名まで収容できた；
- ミサイルやドローン攻撃に起因する消火・がれき解体作業が 156 回、救急が 1,741 回行われ、1,034 名（うち未成年者 36 名）が負傷し、約 200 名の民間人（うち未成年者 6 名）が死亡した；
- 約 800 棟の住宅、122 棟の教育施設、18 棟の保健施設、17 棟の社会福祉施設が被害；
- キーウ市で住民登録をした国内避難者は、約 209,500 名（うち未成年者が約 46,000 名）；
- 市の人道センターが 150 以上の国際パートナーから支援物資を受領し、戦争初期の数ヵ月間は毎日 8,000 名以上に支援物資を、現在でも約 20 万名の国内避難者や高齢者に対して食料品を追加配布；
- 約 14,000 本の樹が植えられ、新カップルの 48,267 組が結婚し、6,476 組が離婚した；
- 36,620 名が誕生し、うち男児 18,768 名、女児 17,852 名、双子 647 組、三つ子 6 組.

この戦争の渦巻、いつ消えるのでしょうか。

（次号へ続く）

※１．https://kyiv.digital/storage/air-alert/stats.html（自動更新、2024 年 3 月 17 日閲覧）。

※２．https://kyivcity.gov.ua/news/vitaliy_klichko_rozpoviv_yak_oboronyalasya_zhila_i_pratsyuvala_stolitsya_protyagom_dvokh_rokiv/（2024 年 3 月 17 日閲覧）。

連載 150　　チェルノブイリから38年、福島から13年

1986 年 4 月 26 日の深夜、チェルノブイリ 4 号炉は爆発した。もうじき 38 年を迎えるチェルノブイリは今どうなっているか。そして爆発から 13 年目を迎えた東電福島第一原発はこれからどうなるのか。原発事故から我々は何を学ぶべきか。過去に学ばなければ人類は再び原子力の災いを犯す。

チェルノブイリの今

38 年前、燃えさかるチェルノブイリ 4 号炉から飛散する放射能を阻止するために、6,000 トンに及ぶ粘土や鉛を空から投下し石棺が作られたが、時間が経つにつれ地盤の不等沈下で屋根が壊れ雨による汚染水が発生したため、2019 年 7 月 11 日に高さ 150mに及ぶ巨大なドームで石棺は覆われた。現在、約 4 千人の作業員が働いている。彼らは月 15 日、または週 4 日の作業で放射能の拡散防止などを続けているが廃炉までには今後 100 年かかるという。1 号炉は現在廃炉作業中、2 号炉は 1999 年 3 月に、3 号炉は 2000 年 12 月に運転停止したが廃炉作業はまだ行われていない。1～3 号炉は 2065 年までに廃炉の計画だが予定通りにいくかどうかは定かでない。チェルノブイリは 2022 年 2 月 24 日のロシアによる侵攻で一時占拠されたがロシア軍は 3 月 31 日に撤退した。チェルノブイリ事故では 144,000ha の農地と 492,000ha の森林が放射能で汚染され放棄されたままである。30 ㎞圏内は現在もそのままの状態で、かつて私たちが訪れた学校や幼稚園の荒れ果てた状況は変わっていないようである。30km 圏内の立ち入り禁止ゾーンには今も 130～150 人のサマショーロが生活しているという。最近の研究によれば、事故当時、乳児や胎児だった人々の脳には損傷が見られ、被曝線量と脳と眼の機能障害には明らかな相関関係が見られるという（ウクライナ国立放射線医学研究所)。チェルノブイリ原発事故の影響はまだまだ続いている。

福島第一原発の今

事故から 13 年経った今も福島第一原発（以下、福 1）の廃炉作業は殆ど進んでいない。メルトダウンして炉底に落ちたデブリは 1 号～3 号合わせて 880 トン。これまで 3 回にわたってロボットで取り出そうとしたが何れも失敗に終わり、1ｇも取り出せていない。原因は何れも高レベルの放射能で、コンピューターなどの電子回路が機能しないため、旧来の機械的操作で取り出すしかない為である。同様の事はチェルノブイリ事故の際にも起こっていた。昨年来、問題になっている放射能汚染水対策も見通しが立たない。3 月 17 日、今年度 4 回目の汚染水の海洋放出が終わり、これまでに 31,200 トンの汚染水が海に放出された。しかし、今も新たな汚染水が毎日 90 トン発生している。地下水や雨水が溶け落ちた炉底に入るからである。本来なら原子炉の周囲をコンクリート壁で覆えば汚染水の増加はなかったはずだが、一時的にしか機能しない凍土遮水壁を採用したためである。汚染水には更に大きな問題がある。発生した汚染水には泥水や細菌などが含まれており、ALPS 処理の為には前処理で汚泥を除去する必要がある。溶けた金属イオンなどを沈殿させるために鉄イオンを含む酸性の液体を投入し、それを中和沈殿するためにアルカリ性の苛性ソーダ水を投入する。その結果、膨大な量の高レベル放射性沈殿物（ヘドロ：3×10（8 乗）Bq/ml が発生し、その量はこれまでに 6,574 ㎥に及ぶが、その処理方法はない。ALPS で処理した汚染水の海洋放出も 30 年では終わらない。政府や東電の「廃炉」は欺瞞に過ぎない。そして放射能汚染地域の除染で出た汚染土壌である。大熊町と双葉町の中間貯蔵施設の汚染土壌は総量 1400 万㎥。これを 2041 年までに町外に運ぶ約束だが、それを受け入れる地域は無い。国や東電のこうした政策は、すべてその場しのぎの逃げ口上である。原子力はそもそもこうした偽善に満ちた産業技術だった。核も原子力も未来を奪う。原子力村の科学者、産業界、政治家達の責任は重い。

（2024 年 3 月 17 日　河田）

【寄付・会員状況のお知らせ】

◆1 月　寄付／会費　153,754 円
◆2 月　寄付／会費　231,000 円
◆2023 年度累計（ウクライナ救援基金を除く）
3,437,541 円（2 月末）
◆2023 年度ウクライナ救援基金 2,950,215 円（2 月末）
◆ウクライナ救援基金累計　25,864,663 円
（2022/3/7～2024/2/29）

◆会員数　179 名
◆ポレーシェ読者数　675 名

～心温まるご支援をありがとうございました～

【寄付のお願い】

◆一般寄付
三菱UFJ 銀行　高畑支店　普通　1682863
◆ウクライナ救援基金
三菱UFJ 銀行　名古屋営業部　普通 6949211
◆郵便振替　00880-7-108610
〈口座名義〉
特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部

＊クレジットカードでも受け付けております
（ページ下の QR コードから寄付ページへアクセス！）

※手書き領収書の郵送が必要な方はご連絡ください

当団体は「認定特定非営利活動法人」ではございませんので、ご寄附は税額控除の対象にはなりません。
ご了承のほどお願いいたします。

事務局だより

今更ながらだが、チェル救の活動は多くの方々に支えられている。振込用紙の片隅に書かれたメッセージでその事を強く実感する。

一方、実際のところ、ウクライナ支援金のご寄附は減っている。その事だけを思えば、悩ましい・・となる。しかし、そのご寄附に込められた思いを知れば、エンジンがかかる。

かつて、「貧者の一灯です」と 1000 円を振り込んで下さった方がみえた。その一灯のありがたさ。その一灯が照らす希望。その「一灯」が頼もしく、値千金と心に染みた。多くの「一灯」で活動は支えられ続けている。どの方のご支援もかけがえのない希望をもたらす一灯と強く思う。

★ご寄附の際、振込用紙に添えられたメッセージ
◇未来ある子どもがこれ以上悲しまないように、安心して暮らせる日々が早く戻りますよう！！
◇支援続けてまいります。（少しずつですが）
◇給料頂きましたので、感謝献金します。
◇言葉にならないロシア、ウクライナ戦争。せめてものカンパです。僅かですみません。
感謝
（山盛）

発行　特定非営利活動法人　チェルノブイリ救援・中部
〒460-0012　名古屋市中区千代田 5 丁目 11-33 ST PLAZA TSURUMAI 本館 5B
TEL＆FAX　052－228-6813（月･水･金　10:00 ～ 15:00）
E-mail　chqchubu@muc.biglobe.ne.jp　URL　http://www.chernobyl-chubu-jp.org
印刷　エープリント

http://www.chernobyl-chubu-jp.org/kessai.html